

播磨の祭り与自然を結ぶ生きもの意匠—絢爛な装飾と「籠り」の身体感覚—

黒田 修司

はじめに

旧播磨国（現在の兵庫県南西部）の諸神社における例祭では、「練り物」あるいは「賑やかし」と称される屋台（太鼓台）の練り出しが、祭礼の白眉となっている。これらの屋台は、木組みから漆塗り、精緻な木彫刻、鍔金具、刺繍に至るまで、伝統職人の技術の精華が横溢する奉納物である。その意匠には、御祭神や地域の歴史、縁起物に加え、地元ゆかりのある動植物が古くから採用されてきた。

本稿では、屋台意匠における「動植物モチーフ」に着目し、そこに投影された人々の想いと信仰の様態を、民俗学的・象徴論的観点から考察する。なお、本稿における分析と考察は、関係者へのヒアリングを基礎としつつも、造形と身体感覚の相関から導き出した著者独自の解釈に基づくものである。

調査方法

期間：2018年～2025年

方法：対象とする祭礼の例祭および式典における現地観察。あわせて図書・資料調査、インターネット検索、関係者への聞き取りを実施した。また、一部の祭礼においては著者が「練り子」として屋台練りに直接参加し、参与観察の手法を用いてその主観的な身体感覚を分析の指標とした。

事例紹介：生きもの意匠の象徴性

1. 都倉屋台（恵美酒宮天満神社：姫路市飾磨区）

【井筒端：クモ、ムカデ、ヤモリ、イモリ、コウモリ】

- ・クモ：『古事記』や『日本書紀』では朝敵や地方豪族を指す蔑称として用いられ、芸能では不吉な象徴とされることが多いが、古代日本においては益虫として認識され、勤勉や機織りの象徴でもあった（小野, 2002）。
- ・ムカデ：仏教では毘沙門天の使いとされ（茂木, 2018）、多足性から商売繁盛の縁起物とされる。都倉町は氏子地区の最北端に位置し、北の守護神である毘沙門天との地理的関連も深い。また、形態が坑道に似るため鉞脈を司るとされるほか（同上）、養蚕守護の信仰とも結びつく。柳田（1990c）の説話を引けば、この意匠は練り子が足並みを揃えることへの戒めという、集団行動の統整を促す教訓とも解釈できる。
- ・イモリ・ヤモリ：各々「井守」「家守」の字をあて、水源や家宅を守護する、生活空間の安寧を担保する象徴的存在である。
- ・コウモリ：中国文化において「蝠」が「福」と同音であることから、福德招来や幸福・長寿を象徴する瑞獣として扱われる。

2. 東今宿屋台（高岳神社：姫路市西今宿）

【男柱・脇棒受け：コイ】

- ・コイ：「登竜門」伝説に基づき、努力・出世・変容を象徴する（茂木, 2018）。屋台への採用は、地域住民の発展と繁栄への祈念を示すものと考えられる。

3. 横尾屋台（住吉神社：加西市北条町）

【脇棒受け：アゲハチョウ】

- ・アゲハチョウ：翅の形状からジャコウアゲハの可能性が高い。他屋台の事例と同様、蝶が象徴する「再生」「変態」「春の到来」といったモチーフを共有していると考えられる（黒田, 2025）。

4. 英賀東屋台（英賀神社：姫路市英賀宮町）

【露盤：玉虫細工】

- ・タマムシ：構造色による不変の輝きを放ち、古くから縁起の良い虫とされる（文化財虫菌害研究所）。「箆笥に入れると着物が増える」という俗信もあり、その再生的性質から神聖性と繁栄の象徴として位置づけられている。

考察

表現の多様化

前報（黒田, 2025）では、播磨地方の太鼓台、すなわち「屋台」における意匠の多様化について論じ、御祭神や地域ゆかりの事象、縁起物、開運・必勝祈願的題材など、さまざまな象徴が取り入れられていることを指摘した。動植物モチーフもその一部であり、民俗的信仰や地域文脈のみならず、美術的・象徴的表現としての系譜をもつ点が注目される。

その背景には、江戸文化に根づく自然観がある。江戸中期の浮世絵師・喜多川歌麿は『画本虫撰』などの絵本で、ムカデ・チョウ・トンボ・カマキリといった虫を狂歌と組み合わせて描き、虫を男女の恋情・感情・季節感を象徴化する媒体として扱った（狩野, 2023; 喜多川, 2012, 2014）。こうした「虫を通した人間表現」は、屋台における縁起物的象徴とも響き合い、日本の自然観が信仰と美の境界に位置づけられてきたことを示している。

とりわけムカデは「粘り強さ」「執念」「戦い」などの象徴とされ、毘沙門天の使いという宗教的意味と、人間の情念を重ね合わせるような表現がなされた。また、チョウは「変化」「再生」「儚さ」といったイメージによって生命の循環を美的に表すモチーフとして広く用いられた。このような江戸期の虫の象徴表現は、近世以降の造形芸術や民俗工芸に継承され、播磨の祭り屋台にみられるムカデやチョウの意匠もまた、宗教的信仰と美的象徴性の両義的伝統の延長線上に位置づけられる。すなわち屋台に刻まれた虫たちは、単なる縁起物ではなく、「人と自然」「信仰と美」の交差点に立つ存在として、地域の文化的記憶や祈願の内容を映し出しているのである。

「マツリ」から「祭礼」へ

日本の祭りは、生命および生活と根源的に関わるものとして営まれてきたが、その形態と意味は時代とともに大きく変遷している（植松, 1994）。

大正期に日本民俗学を創始した柳田國男は、神の降臨を中心とする祝祭の論理を提示した。柳田（1990a）によれば、古来の「マツリ」とは「籠る」ことを意味し、酒食をもって神をもてなし、一同が神の御前に侍坐する行為を指していた。祭りにおいては、神霊への食事供献と、同じ食物を人々が分かち合う行為を成立させる準備が不可欠であり、それは単なる儀礼手順ではなく、神と人との相互交感を可能にする時間的・空間的構造を形成していた。

しかし、信仰を共有しない「観客」、すなわち審美的立場から祭りを見る者の出現により、「マツリ」は「祭礼」へと変容した。この変化に伴い、祭を執行する村人たちは「見られる祭」を意識し、美的完成度を高めようとする態度を形成した。屋台意匠の多様化は、こうした「祭礼化」の過程に位置づけることができる。

「敬神」から「祈願」へ

時代の推移とともに、カミへの信仰態度も変化した（柳田, 1990b）。カミは当初、氏（血縁集団）

が祀る祖先神として存在したが、やがて村落共同体の共有神である村氏神へ変容し、さらに効験あらたかな勧請神へと移行した。祭祀の目的も、一族や一郷の繁栄・安寧、外敵の駆逐を願う敬神の態度から、豊作・海上安全・家内安全・商売繁盛・学問成就など、より具体的・個別的な祈願へと変化していった。現代においては、観光資源としての役割も加わり、祭礼は地域社会の表現活動としても機能するに至っている。

「いい練り」を志向する共同性

現代の祭礼では観覧者の目的や嗜好が多様化しているが、屋台練りに関わる実働者（役員、練り子、太鼓打ち＝乗り子など）には、「いい練りをしたい」という共通の志向が見られる。この志向は単なる技術的達成を超え、共同的行為における美的・精神的充足を追求する態度と捉えることができる。練りの場では、身体の一体的運動と心理的集中が重なり合い、参加者間に強い結束感と共同感覚が形成される。

「籠る」と「敬神」の感覚

心理学者ガーフィールド（Garfield, 1984）は、スポーツにおけるピークパフォーマンスに伴う主観的体験を八つの特徴に分類している。すなわち、①精神的リラックス（Mentally Relaxed）、②身体的リラックス（Physically Relaxed）、③自信と楽観性（Confident and Optimistic）、④現在への集中（Focused on the Present）、⑤高いエネルギー状態（Highly Energized）、⑥鋭敏な自己・環境への気づき（Extraordinary Awareness）、⑦統制感（In Control）、⑧繭の中の感覚（In a “Cocoon”）である。

筆者の観察および経験によれば、屋台練りにおいて「よい練りができた」と実感される瞬間には、特に⑧「繭の中の感覚」に近い心理状態が生じる。この状態では、強度の身体的集中と精神的静謐が同時に成立し、外界からの刺激が遮断されたような内的統一が形成される。練り子は自己と他者、さらには屋台そのものとの境界を失い、身体と集団のリズムが一体化する。この体験は、祭礼の原初的構造である「籠る」と「敬神」の感覚を、現代において身体的・心理的に再現する行為である。この視点から、屋台練りは単なる地域行事を超えた、古層の「マツリ」の原初的体験を継承する儀礼として位置づけることができる。

結論

以上の考察から、屋台練りに関する身体的・心理的体験は、古層の祭祀に内包されていた「籠る」および「敬神」の構造を、現代において再演させる装置として機能していると言える。そして、多様な動植物意匠は、単なる装飾要素ではなく、象徴として多様な領域を媒介する機能を担っている。ここでは、「自然と人間」「信仰と美術」「地域と外部」「過去と現在」といった二項対立的な境界が、緩やかに溶け合いながら新たな意味の連関を形成している。

すなわち、播磨の祭礼屋台に刻まれた生きものたちは、境界を越えて世界を再接続する「文化的装置」であり、地域社会における祭礼の根源的体験を支える象徴的基盤となっている。本稿は、播磨の自然観と祭礼文化が共有するこの「境界の融解」という特質を、動植物意匠と身体感覚の両側面から見出した。

参考文献

- Garfield, C. A. & Bennett, H. Z. (1984). Peak performance: Mental training techniques of the world's greatest athletes. New York: Warner Bros.
- 保科 英人 編著(2021)「文化昆虫学」の教科書:神話から現代サブカルチャーまで. 八坂書房.
- 狩野 博幸 監修(2023)江戸の図譜 蟲. 河出書房新社.
- 喜多川 歌麿(2014)画本虫えらみ. Kindle 版.

- 喜多川 歌麿(2012)画本虫撰. 芸艸堂.
- 喜多川 歌麿(2018)菊池 庸介編: 画本虫撰, 百千鳥狂歌合, 潮干のつと. Kindle 版. 講談社.
- 茂木 貞純 監修(2018)神社のどうぶつ図鑑. Kindle 版. 二見書房.
- 中村 禎里(2024)日本動物民俗誌. 講談社.
- 小野 展嗣(2002)クモ学—摩訶不思議な八本足の世界. 東海大学出版会.
- 植松 忠博(1994)日本人のカミ信仰について. 国際協力論集, 2(2):21-48.
- 柳田 國男(1990a)柳田國男全集 13. 筑摩書房.
- 柳田 國男(1990b)柳田國男全集 14. 筑摩書房.
- 柳田 國男(1990c)柳田國男全集 19. 筑摩書房.
- 柳田 國男(2013)三浦 佑之 編: 日本の昔話. Kindle 版. 角川文庫.

Web サイト

- 東北歴史博物館. (宮城県角田市) 福応寺毘沙門堂奉納養蚕信仰絵馬.
<https://www.thm.pref.miyagi.jp/virtual/ema/>
- 文化財虫菌害研究所. タマムシについて.
<https://www.bunchuken.or.jp/management/2329.html/>